木山捷平全集

第八巻

講談社

木山捷平全集 第八巻

昭和五十四年六月三十日 第一刷発行
定価 三八〇〇円

著者 木山捷平
発行者 野間省一
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
電話東京03九四五―一一一一(大代表)
振替東京八―三九三〇郵便番号一一二

編集 株式会社第一出版センター
印刷 豊国印刷株式会社
製本 島田製本株式会社

© 木山みさを 昭和五十四年
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替え致します。

0393-423481-2253 (0)

木山捷平全集　第八巻　目次

〈小説〉

赤い靴下　九
ななかまど　二六
番外　四一
斜里の白雪　五四
大安の日　六八
長春五馬路（長編）　八五

〈随筆〉

I

長生きはしたいもんじゃ　二〇七
しかられた話とほめられた話　二一三
ノサップ岬　二一五
般若心経と私　二三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

易の話　二二二
おみくじ巡り　二二三
阿武隈の国民宿舎　二二九
入院　二三七
点滴日記　二三九
Ⅱ
わが半生記　二四五
〈短歌・俳句〉
短歌
十八歳の頃　二八七
東京晩秋　二八七
敗戦のとき満洲にて　二八八
俳句
旧きノートより　二九一

雨月会にて　二九三
在郷三年　二九三
文壇句会抄　二九五
病床にて　三〇三
日記　昭和四十三年　三〇五
年譜　三五五
著書目録　三七五
あとがき　木山みさを　三九三

題字　蓬莱利兼
装幀　アトリエ・セブン

木山捷平全集

第八巻

小

説

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

赤い靴下

一

木井は冬になると嬉しくなることが一つある。人様に吹聴するほどのことでもないが、彼の仕事部屋に炬燵が出せるからである。炬燵を出すとそれまで敷きっ放しだった万年床が解消して、誰が突然はいって来ても、慌てふためくようなことがなくなるからである。

もっとも木井は原則として、お客様は仕事部屋には通さないことにしている。ちっぽけな母屋に後からくっつけた二階なので、梯子段が急すぎて慣れないお客様がひっくりころげて足を挫いたりすれば、お互いに迷惑だからである。そういう理由によるものだが、実をいうとこれは表向きの話で、もう一つ本当のことを白状すると、リューマチ持ちの老妻がお茶の持ち運びが難儀だという申入れを百パーセント聴き容れてやっているのである。一方妻の方でも多少の不便はしのばなければならない。元来女の勢力範囲にあると見なされている茶の間を客と夫のために提供すれば、妻はその間彼女が無二の好物であるテレビから疎外される結果になるのである。囲碁友達でもやって来れば、夜ふけの二更三更に及ぶことも稀ではない。それでも申入れを撤回しないところからすれば、彼女は疎外感に舌鼓を打つほど近代的な女ではないから、やはりそれは肉体の利害関係からくるものと解するのが一番妥当のようである。

ことし（昭和四十二年）木井は初炬燵を十月十八日に出した。妻がつけてくれる日記帳にそう書いてあるから、多分まちがいはない。その日東京の最高気温は14・7、最低気温は12・6であった。もっともこれは小学生の夏休帳よろしく妻が翌日の新聞を見てつけるので、東京二十三区のなかでは一番甲州に近い練馬のはずれとはかなりの誤差がある筈である。日記も年をとるとお粗末になり殺風景になってくるものだ。

木井の生れは備中の山村だが、一年一度の氏神様の祭礼は十月の二十三日だった。ちょうどその祭礼を境に木井の祖父母は炬燵びらきをした。祖父母の炬燵に入ると臍くさい匂いがして大げさに鼻をつまんだりして祖父母を顰蹙させたものだが、現在の木井の炬燵にもちょうどあれと同じ

ような匂いが立ち籠めているに違いないのである。
当日の日記の頁には気温と天気（雨）を記録したあと、新聞の四行記事が貼りつけてある。次のような消息記事である。
『▽詩人の草野心平氏は右眼網膜はく離のため17日、東京都江東区大島六の八の五の江東病院に一ヵ月の予定で入院した。』
なお、その前の日の十七日にも、天気（曇）、気温最高17・6、最低15・6と記入したあと、富田常雄氏の死亡記事が切り抜いて貼りつけてある。次のような十七行記事である。
『富田常雄（作家）
十六日午後六時四十二分、東京都杉並区阿佐谷一ノ八ノ一二の自宅で悪性しゅようのため死去、六十三歳。告別式は二十日午後二時から東京・青山葬儀所で文芸家協会葬として行う。
明治大学を出てから河原崎長十郎、舟橋聖一、今日出海らの劇団「心座」に参加したこともあるが、もっぱら大衆小説の分野で活躍。戦後初の直木賞（昭和二十四年）を受けた「面」「刺青」以来、現代物、時代物を幅広く書き、健康な作風で親しまれた。とくに幼時からなじんだ柔道を素材にした「姿三四郎」は有名。』
右のようなものだが、木井は富田常雄氏に面識があったのではなかった。おこがましく言えば文筆仲間ということにさせて貰ってもかまわぬと思うが、それよりも新聞を切抜いた最大の動機は、富田氏が木井と同年であったのをこの記事ではじめて知ったからであった。
日記には書いてないので、月日まではっきり書けぬのは残念だが、ことしの十二月はじめの午前十一時ごろのことだった。
木井が炬燵にねころがって新聞を読んでいると、外出から帰って来た妻がはいって来て、木井の机の上で何かごそごそはじめた。
「何をしているんだい？」
と木井がややあって声をかけると、
「紐（ひも）をつくってるんですよ」
と妻が返事をした。返事をした声が浮々していた。
だいたい妻はテレビが好きなのは前に述べたとおりだが、もう一つ好きなものに外出がある。一番行きたいところは都心や副都心にあるデパートらしいが、そこへはそんなに度々行くことはできない。バス代最低料金のところまで行ってくるのがせいぜいといった所だが、それでもそこまで行ってくると心が浮々してくる。リューマチ持ちの外

出好きというのは符に合わぬように思われるが、人間の心の志向というものは理屈で断ずることは出来ない。木井も右指に神経痛の持病があるので、日記まで妻に書いてもらうのはその為だが、囲碁友達がやって来てパチパチはじめると、神経病など一ぺんにふっとんでしまうかの如くである。

「紐って何の紐だ？」

木井がきき直すと、

「紐って紐ですけれど」

と妻がかすかな笑い声を立てた。

笑い方が少々失礼でないこともなかった。冬期は無用の長物化しているとはいえ、本来神聖であるべき文筆家の机を無断使用した上、忍び笑いをするとは何事だ、といったような不満が頭をもたげた。

半身をおこして枕の上に肘をつき、妻の動作にじろりと眼をやると、

「腰巻の紐なんですよ」

と妻があわてて先手を打った。

そうしてもう一度忍び笑いをした。二度目の忍び笑いは、わけがわかったので、そんなに失礼とは思わなかった。

机の上に置いてあるのは日本手拭の半分くらいの大きさのもので、それを三つ折か四つ折にして、妻は鋏をいれているところだった。布の色はあせた茶色で、いくら半白の老女が用いるにしてもいささか色気がなさ過ぎた。

「わざわざ、そんなものを町まで買いに行ったのかい」

声をかけると、

「買いに行ったのは腰巻の材料で、これは家にあった有り合せものなんです」

と妻が言った。

「なぜまた、朝早くから腰巻の材料など買いに行く気になったのかね」

「わたし、来年は還暦なんですよ。中風よけの赤い腰巻を実家の恵子が祝ってくれる約束になっているんだけど、約束は去年の四月にしたことだし、恵子はまだ腰巻などしめたことのない高校生だから、もうとっくの昔に忘れてしまっているかも知れませんよ」

「忘れていると思ったら催促状を出せばいいじゃないか。恵子はお前のたった一人の姪だから、遠慮などちっともいらぬ間柄じゃないか」

「でもお祝いの催促なんて気がきかないことじゃないかしら」

「それもそうだなあ。じゃ、おれがうまい知恵をかしてやろう。年賀状の余白に〝私もとうとう今年は還暦を迎える

ことになりました〟と書いておくんだ。いくら恵子が高校生でも必ず思い出すに違いないよ」
「ではそうすることにしましょう。だけど生憎なことに、年賀状の余白に書いたのでは、お正月の間には合いませんよ」
「それはそうだが、おれは男の還暦に赤い頭巾だとか赤い袖無しだとかいうのがあるのは知っていたが、女の還暦に赤い腰巻があるとは全然知らなかったよ。男よりも女の方が、昔から実質的だったのかなあ」
そこまで話した時、妻は裁断の終った布切に針をとおしはじめたので、木井はもう一度ごろりと横になった。話はまだ終っていなかったが、老眼鏡をかけた妻が額に深い縦皺をよせ、口を狐のように尖らせたのが、話を中断させる動機になった。
読みさしの新聞をひろげると、家庭欄に枕の記事が出ているのに眼がとまった。ある大学の家政学の教授の研究調査によるもので、枕はソバ殻が一番だという意見の紹介だった。木井はこの一、二年、日本のあちこちを旅行する機会があったが、どこの宿屋にとまってもスポンジまがいの枕を出されるのに閉口した。見たところふかふかして気持がよさそうに思われるが、して見ると何かインボのような気持がして、寝心地に張りがなかった。張りのあるのはやはりわが家の女房のつくって呉れたものに限るような気がしていた。
木井には重大ニュースだったので、木井はわが意を得たような気がして昼寝をはじめた。というよりもいくら我が意を得た記事でも、新聞活字は眼が疲れて直ぐねむくなるといった方が、より真に近かった。夏の初め頃だったか、眼の縁に蜘蛛の巣のようなものがちらつくので眼医者へ行ったところ、老化現象の一種だろうとあっさり片付けられた。疲れたらすぐ眠るのは木井が自分で考え出した養生法である。
眼がさめた時、妻はまだ縫物をしていた。いくら針仕事の能力が落ちているにしても、腰巻の紐一本縫うのに、そんなに長い時間が必要な筈がなかった。木井の睡眠した時間が短時間だった証拠だった。
「おい、おれは今いびきをかいたかい」
と妻にきくと、
「ええ、たいへんな物すごさでしたよ。わたしもあんな大いびきをかいて熟睡したら、どんなに気持がいいだろうと、つくづく羨ましい気がしましたよ」
と妻が言った。
「枕がよかったんだろう。今日の新聞にそういう記事が出ているよ。ところで今日お前は町へ出て、町には何か変っ

たニュースのようなものはころがっていなかったかい」
「そうね。ことしは官庁ボーナスが早かったせいか、町はどこの店も若い奥さん連中で一ぱいでしたね」
「そういうのは新聞を見ても大体の見当はつくというものだ。ころがっているというよりも、落ちていたというような奴は何もなかったかい」
「落ちていたのなら、一つあります」
　と妻が言った。
「ホウ、何だ？」
「でも、軽蔑してはダメですよ」
「軽蔑なんかしないよ。おれはこれでも紳士のつもりでいるんだ」
「道ばたに赤ちゃんの靴下が半分落ちていたのを、わたしが拾って、浦辺さんのところの生垣の上に置いてあるんです」
「置いてあるって、お前が拾ったというのは何日のことなのかね」
「三日前だったか四日前だったか忘れましたけれど、落し主が一向にあらわれて呉れないんです」
「四日たってあらわれなければ、まずは絶望と見なさなければならないだろうな。しかしお前が拾ったという場所はいったい何処だったのかね」
「生垣のちょうど真下のところでしたよ。拾った場所のちょうど真上の生垣の上に置いてあるんです」

二

　午後、木井は外出した。運動不足を補うための外出だから行く先に当てはなかったが、足はひとりでにバス停の方へむかった。
　それも嘘ではないが、彼はやはり赤ちゃんが落した靴下を一目だけでも見ておきたかった。無くなったらおしまいであるから、意識下の何とかいうのが外出の動機になったというのが、一番妥当であるかも知れなかった。
　ゆるい坂をのぼって三、四分、浦辺さん宅は道の三つ角にある庭の広い家である。ちかごろ自動車を買って車庫ができたが、垣根は十年前と同じくサワラの生垣である。生垣が荒れ放題みたいになっているのは、近々コンクリ塀にやりかえようという心づもりがあるのかも知れなかった。もしそれが本当なら「およしなさい。今にきっと東京では生垣が何とか文化財になるにきまっていますよ」と忠告してあげたいところだが、木井は浦辺家の主人とも奥さんともつきあいはないのである。妻の話によると、上の子が小学校の六年生、下の子が小学校の一年生だということである。

靴下はすぐに木井の眼にとまった。しかし妻は垣根の上に置いてあると言ったが、それは厳密にいえば間違いであった。大いびき即熟睡と考えるような女だから、今更どうのこうのと言って見てもはじまらぬが、靴下は四目垣から一本だけはみ出している竹の棒の先にかぶせてあったのである。

間違いは間違いでも、結果的にはこの方がよかった。竹は褐色にくちていたので、赤い靴下の色が却って見ばえがして、竹のおじいさんが還暦祝をして貰っているかのような印象であった。

「ハハン、わかった。女房のやつ、赤い腰巻が買いたくなったのは、きっとこれと何か関係があるな」

と思いながら、木井は横目で通り過ぎた。

バス停まで出てバスを待ったが、バスは容易に来なかった。待っている間に木井は寒くなった。冬になってから和服でする外出ははじめてで、出る時インバネスを妻にさがさせたが、妻はどこにしまってあるかすぐには思い出せなかった。天気が上々なので、妻がもう少し待てというのもきかず飛び出して来たのを、木井はいくらか後悔した。

あきのタクシーが通りかかったので手をあげて乗り込むと、

「どちらへ？」

と運転手がきいた。

「そうだなあ。どこがいいかなあ。適当な所がいいんだけど」

というと、

「はっきり言ってくださいよ」

と運転手が声を強めたので、

「Hの火葬場にしよう。Hの火葬場を君は知っているね」

というと運転手は無言ではしり出した。

寒くなったのが元で、木井は一ぱいやりたくなったのである。若いものの趣味にはあうまいが、年寄りは火葬場の前の茶店で一ぱいやると、奇妙に気持がおちつくのである。あまり人には言いたくないが、あそこでやると飲代も非常にやすくあがるのである。

タクシーが五日市街道の葉のおちた欅並木を通りすぎると、お寺が一軒あった。いつもひっそりしているお寺だが、この日は特別に森閑としていた。高い築地からのぞいている枇杷の木の枝に、小春日の光を一ぱい浴びた茶色の花が、気をつけねば見損じるような姿で、群がり咲いているのが見えた。

もう少し行くと葬儀屋が一軒見えた。店のガラス戸はあいていたが、奥行の広い土間には、店番もお客も一人も見えなかった。ショウウィンドに並んでいる白い骨壺だけが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com